

第2四半期報告書

本書は、EDINET(Electronic Disclosure for Investors' NETwork)システムを利用して金融庁に提出した第2四半期報告書の記載事項を、紙媒体として作成したものです。

三菱マテリアル株式会社

(E00021)

目 次

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【事業の内容】	2
第2 【事業の状況】	3
1 【事業等のリスク】	3
2 【経営上の重要な契約等】	3
3 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	3
第3 【提出会社の状況】	10
1 【株式等の状況】	10
(1) 【株式の総数等】	10
① 【株式の総数】	10
② 【発行済株式】	10
(2) 【新株予約権等の状況】	10
(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】	10
(4) 【ライツプランの内容】	10
(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】	10
(6) 【大株主の状況】	11
(7) 【議決権の状況】	12
① 【発行済株式】	12
② 【自己株式等】	12
2 【役員の状況】	12
第4 【経理の状況】	13
1 【四半期連結財務諸表】	14
(1) 【四半期連結貸借対照表】	14
(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】	16
【四半期連結損益計算書】	16
【第2四半期連結累計期間】	16
【四半期連結包括利益計算書】	17
【第2四半期連結累計期間】	17
(3) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】	18
【注記事項】	19
【セグメント情報】	22
2 【その他】	24
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	25
レビュー報告書	巻末

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成26年11月13日
【四半期会計期間】	第90期第2四半期（自 平成26年7月1日 至 平成26年9月30日）
【会社名】	三菱マテリアル株式会社
【英訳名】	MITSUBISHI MATERIALS CORPORATION
【代表者の役職氏名】	取締役社長 矢尾 宏
【本店の所在の場所】	東京都千代田区大手町一丁目3番2号
【電話番号】	03（5252）5226
【事務連絡者氏名】	経理・財務部経理室管理グループ長 長谷川 篤
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区大手町一丁目3番2号
【電話番号】	03（5252）5226
【事務連絡者氏名】	経理・財務部経理室管理グループ長 長谷川 篤
【縦覧に供する場所】	三菱マテリアル株式会社 大阪支社 （大阪市北区天満橋一丁目8番30号） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第89期 第2四半期 連結累計期間	第90期 第2四半期 連結累計期間	第89期
会計期間	自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日	自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
売上高 (百万円)	703,688	751,194	1,414,796
経常利益 (百万円)	35,485	40,079	76,902
四半期(当期)純利益 (百万円)	29,239	23,238	52,551
四半期包括利益又は包括利益 (百万円)	56,924	30,604	84,565
純資産額 (百万円)	517,097	545,590	525,707
総資産額 (百万円)	1,815,071	1,838,975	1,778,505
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	22.31	17.73	40.10
潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	—	—	—
自己資本比率 (%)	24.9	25.9	25.7
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	34,329	12,549	102,932
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△47,119	△21,458	△44,863
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△7,779	3,497	△69,329
現金及び現金同等物の四半期末(期末)残高 (百万円)	49,055	59,196	62,078

回次	第89期 第2四半期 連結会計期間	第90期 第2四半期 連結会計期間
会計期間	自 平成25年7月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年7月1日 至 平成26年9月30日
1株当たり四半期純利益金額 (円)	8.78	10.48

- (注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
3. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営んでいる事業の内容に重要な変更はありません。

なお、第1四半期連結会計期間より報告セグメントの変更等を行っております。詳細は、「第4 経理の状況 1 四半期連結財務諸表 注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりです。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、新たに発生した事業等のリスクはありません。

また、前連結会計年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについて重要な変更はありません。

2【経営上の重要な契約等】

- (1) 当社は、当社連結子会社である三菱マテリアルトレーディング株式会社との間で、平成27年1月1日を効力発生日として、当社の宝飾品等の販売に関する事業を吸収分割により同社に承継させることを内容とする契約を平成26年9月26日付で締結しました。
- (2) 当社は、日立金属株式会社との間で、同社の完全子会社である日立ツール株式会社の発行済株式の51%を平成27年4月1日を予定日として当社が取得することを内容とした契約を平成26年9月26日付で締結しました。詳細については、「第4 経理の状況 1 四半期連結財務諸表」の「注記事項 (追加情報)」をご参照下さい。

3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1)業績の状況

当第2四半期連結累計期間における世界経済は、アジア地域では、中国やインド等における経済成長の鈍化傾向が継続したものの、米国及び欧州において景気が回復傾向にあったことから、全体としては緩やかに回復しました。

わが国経済は、消費税率引き上げに伴う駆け込み需要の反動があった一方で、雇用・所得環境の改善等がみられ、全体としては緩やかな回復基調が続きました。

当社グループを取り巻く事業環境は、事業全体において円安進行の影響を受けた一方で、建設工事の遅延やエネルギーコスト高といったマイナス要因がありました。

このような状況のもと、当第2四半期連結累計期間の連結業績は、売上高は7,511億94百万円（前年同期比6.8%増）、営業利益は340億34百万円（前年同期比2.1%増）、経常利益は400億79百万円（前年同期比12.9%増）、四半期純利益は232億38百万円（前年同期比20.5%減）となりました。

セグメント情報は次のとおりであります。

第1四半期連結会計期間より、報告セグメントの変更等を行っており、以下の前年同四半期比較については、前年同四半期の数値を変更後の区分に組み替えた数値で比較しております。

なお、前第2四半期連結累計期間及び当第2四半期連結累計期間の報告セグメントごとの営業利益は、有限責任あずさ監査法人の四半期レビューを受けておりません。

(セメント事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減（増減率）
売上高	872	906	34 (3.9%)
営業利益	70	64	△6 (△8.7%)
経常利益	67	60	△7 (△10.7%)

セメントは、国内では、東北地区及び首都圏において公共工事の入札不調や工事の遅れがあったものの、近畿地区及び東海地区において駅前再開発工事、マンション等住宅建設工事等が堅調に推移したことにより、国内総需要は前年同期並みとなり、販売数量もほぼ前年同期並みとなりました。米国では、南カリフォルニア地区における年初の天候不順の影響による建設工事の遅延および販売価格を重視した営業政策により、販売数量は若干の減少となりました。中国では、山東省における高速鉄道工事及び新空港建設工事等による需要が引続き堅調に推移したものの、不動産投資関連の需要が減少したことなどから販売数量は減少しました。なお、事業全体のセメント生産量は、5.9百万トン（前年同期並み）となりました。

また、セメント及び生コン販売価格改定による米国での売上高増加があった一方、操業コストの増加がありました。

以上の結果、前年同期に比べて事業全体の売上高は増加し、営業利益は減少しました。

事業全体の経常利益は、営業利益が減少したことから、前年同期に比べて減少しました。

(金属事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減 (増減率)
売上高	3,669	4,100	430 (11.7%)
営業利益	123	124	1 (1.0%)
経常利益	168	168	△0 (△0.4%)

銅地金は、インドネシア・カパー・スメルティング社における順調な操業の継続により増産となったことから増収増益となりました。なお、事業全体の電気銅生産量は、295千トン（前年同期比33千トン増産）となりました。

金及びその他の金属は、金価格の値動きが小幅であったことにより金地金の売買取扱量が減少したことなどから、減収減益となりました。

銅加工品は、自動車向け製品等の販売が増加したものの、原子力発電設備向け製品の販売が減少したことなどから、増収減益となりました。

以上の結果、前年同期に比べて事業全体の売上高及び営業利益は増加しました。

事業全体の経常利益は、受取配当金が増加したものの、持分法による投資利益が減少したことから前年同期に比べて減少しました。

(加工事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減 (増減率)
売上高	725	680	△44 (△6.1%)
営業利益	75	83	8 (11.8%)
経常利益	70	81	11 (16.0%)

超硬製品は、国内の需要並びに欧州及び東南アジアを中心とした海外の需要が増加したことに加えて、積極的に販売促進に取り組んだ結果、増収増益となりました。

高機能製品は、自動車向け製品の販売が堅調に推移したものの、増産体制を整備するためにコストが増加したことに加えて、平成26年1月に三菱マテリアルシーエムアイ㈱が子会社でなくなったこと及び平成26年7月にMMCスーパーアロイ㈱が持分法適用関連会社になったことなどから、減収減益となりました。

以上の結果、前年同期に比べて事業全体の売上高は減少し、営業利益は増加しました。

事業全体の経常利益は、営業利益が増加したことから、前年同期に比べて増加しました。

(電子材料事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減 (増減率)
売上高	345	305	△39 (△11.5%)
営業利益	20	20	0 (1.9%)
経常利益	9	33	23 (242.1%)

機能材料は、スマートフォン用LSI向け製品の販売が減少したものの、半導体製造装置関連製品の販売が堅調に推移したことなどから、増収増益となりました。

電子デバイスは、白物家電向け製品の販売が増加したことから、増収増益となりました。

多結晶シリコン及び化成品は、四日市工場が爆発火災事故を受けて平成26年6月29日まで操業を停止していたことにより、多結晶シリコンの販売が減少したことなどから、減収減益となりました。

以上の結果、前年同期に比べて事業全体の売上高は減少し、営業利益は増加しました。
事業全体の経常利益は、持分法による投資利益が増加したことから、前年同期に比べて増加しました。

(アルミ事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減（増減率）
売上高	775	809	33（4.3%）
営業利益	43	39	△3（△8.2%）
経常利益	39	36	△2（△7.5%）

アルミ缶は、通常缶及びボトル缶の需要がともに増加しました。
アルミ圧延・加工品は、自動車向け製品を中心に需要が増加しました。
事業全体ではエネルギーコスト及び原材料コストが上昇しました。
以上の結果、前年同期に比べて事業全体の売上高は増加し、営業利益は減少しました。
事業全体の経常利益は、営業利益が減少したことから、前年同期に比べて減少しました。

(その他の事業)

(単位：億円)

	前第2四半期 連結累計期間	当第2四半期 連結累計期間	増減（増減率）
売上高	1,181	1,147	△34（△2.9%）
営業利益	25	30	5（20.5%）
経常利益	25	49	23（91.7%）

エネルギー関連は、石炭の販売及び原子力関連における福島除染事業の販売が減少したことから、減収減益となりました。

E-waste（使用済みの電子電気製品）リサイクルは、売上高及び営業利益ともに前年同期並みとなりました。
なお、原子力・エンジニアリング関連部門の受注高は、393億円（前年同期比86億円増）、受注残高は、401億円（同147億円増）となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当第2四半期連結累計期間の営業活動によるキャッシュ・フローは、たな卸資産や売上債権が増加したものの、業績が堅調に推移した影響等により、125億円の収入（前年同四半期比217億円の収入減少）となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当第2四半期連結累計期間の投資活動によるキャッシュ・フローは、設備投資に係る支出等により、214億円の支出（前年同四半期比256億円の支出減少）となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動や投資活動の結果、89億円の支出となり、この資金を借入により調達したことなどにより、当第2四半期連結累計期間の財務活動によるキャッシュ・フローは、34億円の収入（前年同四半期比112億円の支出減少）となりました。

以上の結果、当第2四半期連結会計期間末の現金及び現金同等物の残高は、591億円（前連結会計年度末比28億円減少）となりました。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

① 全社課題

当社グループを取り巻く事業環境につきましては、国内、海外ともに景気が緩やかな回復傾向にある一方で、為替、金属価格及び電力料金等の要素が業績に影響を与える可能性があります。

このような状況のなか、当社グループは、2020年代初頭までを視野に入れた長期経営方針のもと、「ユニークな技術により、地球に新たなマテリアルを創造し、循環型社会に貢献するNo. 1 企業集団」となることを目指しておりますが、その実現に向け、足許では中期経営計画（2014-2016）「Materials Premium（マテリアル・プレミアム）2016 ～No. 1 企業集団への挑戦～」において、「成長基盤の強化」（安全管理体制の強化、戦略投資の実施、事業の継続的な選択と集中による財務体質の改善等）、「グローバル競争力の強化」（既存の海外生産・販売拠点の拡充、新興国を中心とした新規生産・販売拠点の展開、特に自動車・エレクトロニクス産業を対象とした戦略的なマーケティングの実施による新たな顧客や市場の開拓等）及び「循環型ビジネスモデルの追求」（廃棄物再利用の促進等）に注力してまいります。

② 会社の支配に関する基本方針

1) 会社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針の内容の概要

当社の支配権は、原則として当社株式の市場での自由な取引により決定されるべきものであり、株式の大規模買付等（下記3）B.（イ）において定義されます。以下同じとします。）の提案に応じるか否かのご判断について、原則として、個々の株主の皆様のご自由なご意思が尊重されるべきであると考えております。

しかしながら、株式の大規模買付等の中には、企業価値・株主共同の利益、ひいては中長期的な株主価値（以下、単に「中長期的な株主価値」といいます。）を著しく損なう可能性のあるものや株主の皆様に株式の売却を事実上強要するおそれのあるものなど、当社の中長期的な株主価値に資さないものも想定されます。また、当社は、当社株式の大規模買付等を行う者が、当社を取り巻く経営環境を正しく認識し、当社の企業価値の源泉を理解した上で、これを中長期的に確保し、向上させなければ、当社の中長期的な株主価値は毀損される可能性があると考えております。

更に、株主の皆様の投資行動の自由をできる限り尊重すべきであることはいうまでもありませんが、当社としては、現在のわが国の公開買付制度は、株主の皆様が一定の大規模買付等に応じるか否かをご判断されるために必要な情報を取得し、検討するための時間と手続が必ずしも十分ではなく、中長期的な株主価値が害される可能性もあると考えております。

以上のことから、当社は、上記のような当社の中長期的な株主価値を毀損する可能性のある大規模買付等を行う者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者としては適切ではないものと考えております。このため、当社は、当社の中長期的な株主価値に反する大規模買付等を抑止するため、当社株式の大規模買付等が行われる場合に、不適切な大規模買付等でないかを株主の皆様がご判断するために必要な情報や時間を確保したり、株主の皆様のために買付者と交渉等を行ったりするための枠組みが必要であると考えております。

2) 基本方針の実現に資する特別な取り組みの内容の概要

当社は、当社の淵源である金属・石炭の鉱山事業で培った技術等をもとに様々な分野において事業を展開してきました。その結果、現在では、セメント、金属、加工、電子材料、資源・リサイクル及びアルミ等の事業を行う複合事業集団となっております。また、当社は、様々な事業活動を通して社会に貢献することを企業理念の基本とし、これまで、総合素材メーカーとして、人々が生活する上で欠くことのできない基礎素材を世の中に供給してきました。更に、環境負荷の低減や循環型社会システム構築への貢献を目指し、豊かな社会をつくるために不断の努力を行ってまいりました。当社は、事業活動の発展はもとより、社会との共生も図りながら、株主、従業員、顧客、地域社会、サプライヤーその他多数の関係先を含むステークホルダーの皆様から更なる信頼を得ることにより、中長期的な株主価値の確保・向上に努めてまいりたいと考えております。

このようななかにあつて、当社グループは、2020年代初頭に向けた長期経営方針において、「ユニークな技術により、地球に新たなマテリアルを創造し、循環型社会に貢献するNo. 1 企業集団」を目指すこととしております。今後は、「No. 1 企業集団」の実現に向け、中期経営計画（2014-2016）「Materials Premium 2016 ～No. 1 企業集団への挑戦～」において、「成長基盤の強化」、「グローバル競争力の強化」及び「循環型ビジネスモデルの追求」を全社成長戦略とし、諸施策を実施してまいります。

3)基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取り組みの概要

当社は、上記2)記載の企業理念と諸施策のもと、今後も当社の中長期的な株主価値の最大化を追求してまいりますが、その一方で、上記1)記載のような当社の中長期的な株主価値を毀損する可能性がある大規模買付等が行われる可能性も否定できないと考えております。そこで、当社は、平成25年5月10日開催の当社取締役会において、「当社株式の大量取得行為に関する対応策（買収防衛策）」を従前のものから一部改定した上で更新すること（改定後の対応策を以下「新対応策」といいます。）を決議し、同年6月27日開催の当社第88回定時株主総会において、株主の皆様のご承認をいただきました。

新対応策の概要は、次のとおりであります。なお、新対応策の詳細につきましては、平成25年5月10日付のプレスリリース「当社株式の大量取得行為に関する対応策（買収防衛策）の更新について」において公表しておりますので、以下の当社ホームページをご参照下さい。

<http://www.mmc.co.jp/corporate/ja/01/01/13-0510.pdf>

A. 新対応策の基本方針

当社は、中長期的な株主価値の確保・向上を目的として、当社株式の大規模買付等を行い、または行おうとする者に対し、遵守すべき手続を設定し、これらの者が遵守すべき手続があること、及び、これらの者に対して一定の場合には当社が対抗措置を発動することがあり得ることを事前に警告すること、並びに、一定の場合には当社が対抗措置を実際に発動することをもって当社株式の大量取得行為に関する対応策（買収防衛策）といたします。

B. 新対応策の内容

(イ) 対象となる大規模買付等

新対応策は、以下のa. またはb. に該当する当社株券等の買付けまたはこれに類似する行為（以下「大規模買付等」といいます。）がなされる場合を適用対象といたします。大規模買付等を行い、または行おうとする者（以下「買付者等」といいます。）は、予め新対応策に定められる手続に従わなければならないものといたします。

- a. 当社が発行者である株券等について、保有者の株券等保有割合が20%以上となる買付け
- b. 当社が発行者である株券等について、公開買付けに係る株券等の株券等所有割合及びその特別関係者の株券等所有割合の合計が20%以上となる公開買付け

(ロ) 「意向表明書」の当社への事前提出

買付者等には、大規模買付等の実行に先立ち、当社取締役会に対して、新対応策に定める手続を遵守する旨の誓約文言等を日本語で記載した書面（以下「意向表明書」といいます。）を提出していただきます。

(ハ) 情報の提供

意向表明書をご提出いただいた場合には、当社は、買付者等に対して、当初提出していただくべき情報を記載した「情報リスト」を送付いたします。買付者等には、かかる「情報リスト」に従って十分な情報を当社に提出していただきます。

また、上記の「情報リスト」の発送後60日間を、当社取締役会が買付者等に対して情報の提供を要請し、買付者等が情報の提供を行う期間（以下「情報提供要請期間」といいます。）として設定し、情報提供要請期間が満了した場合には、直ちに取締役会評価期間（下記（ホ）において定義されます。以下同じとします。）を開始するものといたします。ただし、買付者等から合理的な理由に基づく延長要請があった場合には、情報提供要請期間を必要に応じて最長30日間延長することができるものといたします。他方、当社取締役会は、買付者等から提供された情報が十分であると判断する場合には、情報提供要請期間満了前であっても、直ちに情報提供要請期間を終了し、取締役会評価期間を開始するものといたします。

(ニ) 情報の開示

当社は、買付者等から大規模買付等の提案がなされた事実とその概要を開示いたします。また、株主の皆様のご判断に必要であると認められる情報がある場合には、適切と判断する時点で開示いたします。

また、当社は、買付者等による情報の提供が十分になされたとき当社取締役会が認めた場合には、速やかにその旨を買付者等に通知（以下「情報提供完了通知」といいます。）するとともに、その旨を開示いたします。

(ホ) 取締役会評価期間の設定

当社取締役会は、情報提供完了通知を行った後または情報提供要請期間が満了した後、大規模買付等の評価・検討を開始いたします。当社取締役会による評価、検討、交渉、意見形成及び代替案立案のための期間（以下「取締役会評価期間」といいます。）は、大規模買付等の態様に応じて最長60日間または最長90日間といたします。

ただし、取締役会評価期間は当社取締役会が必要と認める場合または独立委員会の勧告を受けた場合には最長30日間延長できるものといたします。

(ヘ) 独立委員会に対する諮問

新対応策においては、対抗措置の発動等に当たって、当社取締役会の恣意的判断を排除するため、当社の業務執行を行う経営陣から独立した者のみから構成される独立委員会を設置しております。

当社取締役会は、買付者等が新対応策に定める手続を遵守しなかった場合、または買付者等による大規模買付等が当社の中長期的な株主価値を著しく損なうものであると認められる場合であって、対抗措置を発動することが相当であると判断する場合には、対抗措置の発動の是非について、独立委員会に対して諮問するものといたします。

(ト) 対抗措置の発動に関する独立委員会の勧告

独立委員会は、当社取締役会から対抗措置の発動の是非に関する諮問があった場合には、当社取締役会に対して、対抗措置の発動の是非に関する勧告を行うものといたします。

(チ) 取締役会の決議

当社取締役会は、上記（ト）の独立委員会の勧告を最大限尊重し、対抗措置の発動に関する決議を行うものといたします。

(リ) 株主意思確認総会の開催

当社取締役会は、以下の場合には、株主総会の開催が著しく困難な場合を除き、株主総会を開催し、対抗措置の発動に関する議案を付議するものといたします（かかる株主総会を以下「株主意思確認総会」といいます。）。

a. 独立委員会が対抗措置の発動についての勧告を行うに際して、対抗措置の発動に関し株主総会の承認を予め得るべき旨の留保を付した場合

b. 当社取締役会が、株主の皆様のご意思を確認することが相当であると判断した場合

当社取締役会は、株主意思確認総会の決議に従って、対抗措置の発動に関する決議を行うものといたします。

(ヌ) 大規模買付等の開始時期

買付者等は、当社取締役会が株主意思確認総会を招集することを決定した場合には、当社取締役会が株主意思確認総会の決議に基づく対抗措置不発動の決議を行うまでは、大規模買付等を開始することはできないものといたします。また、株主意思確認総会が招集されない場合においては、取締役会評価期間の経過後にのみ大規模買付等を開始することができるものといたします。

(ル) 対抗措置の中止または撤回

当社取締役会は、対抗措置の発動を決議した場合であっても、以下の場合には、当該対抗措置の中止または撤回について、独立委員会に諮問するものといたします。

a. 買付者等が大規模買付等を中止もしくは撤回した場合

b. 対抗措置を発動するか否かの判断の前提となった事実関係等に変動が生じ、かつ、当社の中長期的な株主価値の確保・向上という観点から、発動した対抗措置を維持することが相当でないと考えられる状況に至った場合

当社取締役会は、独立委員会の勧告を最大限尊重し、当該対抗措置を維持することが相当でないと判断するに至った場合には、当該対抗措置の中止または撤回を決議いたします。

(ロ) 新対応策における対抗措置の具体的内容

新対応策に基づいて発動する対抗措置は、原則として新株予約権の無償割当てといたします。

当該新株予約権は、割当て期日における当社の株主に対し、その所有する当社普通株式1株につき1個の割合で割当てられます。また、当該新株予約権には、買付者等別途定める要件に該当する非適格者は行使することができないという行使条件のほか、当社が非適格者以外の者が所有する新株予約権を取得し、これと引き替えに新株予約権1個につき1株の当社普通株式を交付することができる旨の取得条件等が付されることが予定されております。

(ワ) 新対応策の有効期間、廃止及び変更

新対応策の有効期間は、平成28年6月開催予定の当社第91回定時株主総会終結の時までといたします。

なお、かかる有効期間の満了前であっても、以下の場合には、新対応策はその時点で廃止されるものいたします。

- a. 当社の株主総会において新対応策を廃止する旨の議案が承認された場合
- b. 当社の取締役会において新対応策を廃止する旨の決議が行われた場合

また、当社は、法令等の改正に伴うもの等の形式的な事項について、基本方針に反しない範囲で、新対応策を変更する場合があります。

4) 上記2)の取り組みが、上記1)の基本方針に沿い、株主の皆様の共同の利益を損なうものではなく、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないことに関する取締役会の判断及びその理由

上記2)の取り組みを通じて、当社の中長期的な株主価値を確保・向上させ、それを当社株式の価値に適正に反映させていくことにより、当社の中長期的な株主価値に反する大規模買付等は困難になるものと考えられ、上記2)の取り組みは、上記1)の基本方針に沿うものであると考えております。

従って、上記2)の取り組みは、当社の株主の皆様の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

5) 上記3)の取り組みが、上記1)の基本方針に沿い、株主の皆様の共同の利益を損なうものではなく、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないことに関する取締役会の判断及びその理由

上記3)の取り組みは、十分な情報の提供と十分な検討等の期間の確保の要請に応じない買付者等、及び当社の中長期的な株主価値を著しく損なう大規模買付等を行おうとする買付者等に対して対抗措置を発動できることとすることで、これらの買付者等による大規模買付等を防止するものであり、上記1)の基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取り組みであります。また、上記3)の取り組みは、当社の中長期的な株主価値を確保・向上させることを目的として、買付者等に対して、当該買付者等が実施しようとする大規模買付等に関する必要な情報の事前の提供、及びその内容の評価・検討等に必要な期間の確保を求めるために実施されるものです。更に、上記3)の取り組みにおいては、株主の皆様のご意思を確認する手続の導入、独立性の高い委員により構成される独立委員会の設置及びその勧告の最大限の尊重、合理的かつ客観的な対抗措置発動要件の設定、株主意思確認総会の決議に基づく対抗措置の発動等の、当社取締役会の恣意的な判断を排し、上記3)の取り組みの合理性及び公正性を確保するための様々な制度及び手続が確保されているものであります。

従って、上記3)の取り組みは上記1)の基本方針に沿うものであり、当社の株主の皆様の共同の利益を損なうものではなく、また、当社の役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

(4) 研究開発活動

当第2四半期連結累計期間の研究開発活動は、基本的には各事業の基幹となる分野の研究を当社単独で、あるいは連結会社と連携をとりながら行い、各社固有の事業及びユーザーニーズに応える研究についてはそれぞれが単独で行っております。研究開発の内容としては、既存事業の領域拡大を主体としながら、当社事業の基礎となる材料の基盤技術とコア技術の高度化、最先端技術の育成を進めております。また、新興国市場をターゲットとした開発テーマにも重点的に取り組み、各セグメントと開発部門が協力して、お客さまにとって魅力ある新製品や新規プロセスの開発に取り組んでおります。今後の技術・開発戦略としては、当社グループで保有する素材・加工・リサイクル技術を有効活用することで、開発のスピードアップと技術・製品の差別化を図ります。特に、自動車、エレクトロニクス、エネルギー、環境リサイクル分野の次期ニーズを取り込み、中長期的に事業の柱となる新事業開発を推進してまいります。

研究開発費の総額は、5,358百万円であり、当第2四半期連結累計期間における研究開発活動の状況に重要な変更はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	3,400,000,000
計	3,400,000,000

②【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末現在発行数（株） （平成26年9月30日）	提出日現在発行数（株） （平成26年11月13日）	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	1,314,895,351	1,314,895,351	東京証券取引所 （市場第一部）	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は、1,000株であります。
計	1,314,895,351	1,314,895,351	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 （株）	発行済株式 総数残高 （株）	資本金増減額 （百万円）	資本金残高 （百万円）	資本準備金 増減額 （百万円）	資本準備金 残高 （百万円）
平成26年7月1日 ～ 平成26年9月30日	—	1,314,895,351	—	119,457	—	85,654

(6) 【大株主の状況】

平成26年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海 1 丁目 8 - 11	86, 803, 000	6. 60
日本マスタートラスト信託銀行株式会社 (信託口)	東京都港区浜松町 2 丁目 11 - 3	51, 973, 000	3. 95
全国共済農業協同組合連合会 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区平河町 2 丁目 7 - 9 J A 共済ビル (東京都港区浜松町 2 丁目 11 - 3)	33, 961, 000	2. 58
明治安田生命保険相互会社 (常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内 2 丁目 1 - 1 (東京都中央区晴海 1 丁目 8 - 12 晴海アイランドトリトンスクエアオフィスタワー Z 棟)	31, 018, 931	2. 36
株式会社三菱東京 U F J 銀行	東京都千代田区丸の内 2 丁目 7 - 1	24, 651, 308	1. 87
三菱重工業株式会社	東京都港区港南 2 丁目 16 - 5	19, 209, 859	1. 46
三菱地所株式会社	東京都千代田区大手町 1 丁目 6 - 1	17, 397, 000	1. 32
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内 1 丁目 6 - 6 日本生命証券管理部内	16, 736, 614	1. 27
三菱電機株式会社	東京都千代田区丸の内 2 丁目 7 - 3	14, 936, 000	1. 14
ザ バンク オブ ニューヨーク メロン エスエー エヌブイ 10 (常任代理人 株式会社三菱東京 U F J 銀行)	RUE MONTOYERSTRAAT 46, 1000 BRUSSELS, BELGIUM (東京都千代田区丸の内 2 丁目 7 - 1 決 済事業部)	14, 819, 135	1. 13
計	—	311, 505, 847	23. 69

(注) 三井住友信託銀行株式会社及びその共同保有者から、平成26年7月4日付の大量保有報告書の写しの送付があり、平成26年6月30日現在でそれぞれ以下のとおり株式を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当第2四半期会計期間末現在における実質所有株式数を確認することができません。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内 1 丁目 4 - 1	51, 754, 000	3. 94
三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社	東京都港区芝 3 丁目 33 - 1	5, 517, 000	0. 42
日興アセットマネジメント株式会社	東京都港区赤坂 9 丁目 7 - 1	12, 699, 000	0. 97
計	—	69, 970, 000	5. 32

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成26年9月30日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 4,531,000	—	「1 (1) ②発行済株式」の「内容」欄に記載のとおりであります。
	(相互保有株式) 普通株式 71,000	—	同上
完全議決権株式 (その他)	普通株式 1,296,210,000	1,296,210	同上
単元未満株式	普通株式 14,083,351	—	同上
発行済株式総数	普通株式 1,314,895,351	—	—
総株主の議決権	—	1,296,210	—

(注) 1. 「完全議決権株式 (その他)」の中には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が14,000株 (議決権14個) 含まれております。

2. 「単元未満株式」には、次の株式が含まれております。

- ・ 自己株式 605株
- ・ 津田電線株式会社名義の株式 800株

② 【自己株式等】

平成26年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数 (株)	他人名義所有 株式数 (株)	所有株式数の 合計 (株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
三菱マテリアル株式会社	東京都千代田区大手町 1丁目3-2	4,531,000	—	4,531,000	0.34
津田電線株式会社	京都府京都市東山区問 屋町通正面上る鍵屋町 485	62,000	—	62,000	0.00
東北運輸株式会社	秋田県秋田市茨島1丁 目2-10	9,000	—	9,000	0.00
計	—	4,602,000	—	4,602,000	0.35

(注) 当第2四半期会計期間末日現在の当社が保有している自己株式は、4,531,605株 (うち単元未満株式は605株) であります。

2 【役員の状況】

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1. 四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間（平成26年7月1日から平成26年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成26年4月1日から平成26年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表について有限責任 あずさ監査法人による四半期レビューを受けております。

1 【四半期連結財務諸表】

(1) 【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	63,486	61,235
受取手形及び売掛金	219,016	242,414
商品及び製品	81,516	92,195
仕掛品	100,280	108,841
原材料及び貯蔵品	103,155	115,676
その他	208,853	213,244
貸倒引当金	△1,843	△1,966
流動資産合計	774,465	831,642
固定資産		
有形固定資産		
機械及び装置（純額）	178,296	178,651
土地（純額）	273,048	271,957
その他（純額）	199,226	191,524
有形固定資産合計	650,571	642,134
無形固定資産		
のれん	38,816	36,066
その他	9,410	10,091
無形固定資産合計	48,226	46,158
投資その他の資産		
投資有価証券	250,576	264,124
その他	61,630	61,899
投資損失引当金	△1,168	△1,168
貸倒引当金	△5,797	△5,815
投資その他の資産合計	305,241	319,039
固定資産合計	1,004,039	1,007,332
資産合計	1,778,505	1,838,975

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年 3 月31 日)	当第 2 四半期連結会計期間 (平成26年 9 月30 日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	106,656	137,366
短期借入金	256,098	265,656
1年内償還予定の社債	40,000	30,000
コマーシャル・ペーパー	—	40,000
未払法人税等	9,576	7,925
引当金	12,899	12,038
預り金地金	212,760	214,736
その他	100,526	101,271
流動負債合計	738,518	808,994
固定負債		
社債	85,140	65,140
長期借入金	268,605	256,905
引当金	7,556	8,488
退職給付に係る負債	52,787	54,876
その他	100,190	98,980
固定負債合計	514,279	484,390
負債合計	1,252,797	1,293,384
純資産の部		
株主資本		
資本金	119,457	119,457
資本剰余金	92,272	92,272
利益剰余金	207,354	222,133
自己株式	△1,782	△1,818
株主資本合計	417,302	432,044
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	31,972	36,256
繰延ヘッジ損益	218	△2,796
土地再評価差額金	32,907	32,794
為替換算調整勘定	△12,348	△10,108
退職給付に係る調整累計額	△13,302	△12,786
その他の包括利益累計額合計	39,447	43,360
少数株主持分	68,957	70,185
純資産合計	525,707	545,590
負債純資産合計	1,778,505	1,838,975

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)
売上高	703,688	751,194
売上原価	606,801	651,914
売上総利益	96,887	99,279
販売費及び一般管理費	※63,550	※65,245
営業利益	33,336	34,034
営業外収益		
受取利息	243	283
受取配当金	7,172	7,631
持分法による投資利益	2,201	4,893
固定資産賃貸料	2,343	2,455
その他	979	1,027
営業外収益合計	12,940	16,291
営業外費用		
支払利息	5,005	4,334
その他	5,786	5,912
営業外費用合計	10,791	10,246
経常利益	35,485	40,079
特別利益		
投資有価証券売却益	1,412	296
固定資産売却益	4,075	130
その他	1,328	283
特別利益合計	6,815	710
特別損失		
環境対策引当金繰入額	—	1,300
操業停止損失	—	1,101
投資有価証券評価損	114	799
その他	2,580	1,196
特別損失合計	2,694	4,398
税金等調整前四半期純利益	39,606	36,391
法人税等	7,932	10,497
少数株主損益調整前四半期純利益	31,673	25,893
少数株主利益	2,433	2,654
四半期純利益	29,239	23,238

【四半期連結包括利益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益	31,673	25,893
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	5,916	4,230
繰延ヘッジ損益	395	△3,039
為替換算調整勘定	15,100	4,117
退職給付に係る調整額	—	883
持分法適用会社に対する持分相当額	3,838	△1,481
その他の包括利益合計	25,250	4,710
四半期包括利益	56,924	30,604
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	50,273	27,264
少数株主に係る四半期包括利益	6,651	3,339

(3) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益	39,606	36,391
減価償却費	28,294	26,426
引当金の増減額 (△は減少)	△423	△1,847
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	—	△580
受取利息及び受取配当金	△7,415	△7,914
支払利息	5,005	4,334
持分法による投資損益 (△は益)	△2,201	△4,893
有形固定資産売却損益 (△は益)	△4,162	△102
投資有価証券評価損益 (△は益)	114	799
売上債権の増減額 (△は増加)	5,819	△27,305
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△5,621	△34,995
仕入債務の増減額 (△は減少)	△7,038	27,609
その他	△13,545	△1,259
小計	38,431	16,662
利息及び配当金の受取額	8,409	8,385
利息の支払額	△5,237	△4,383
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△7,273	△8,114
営業活動によるキャッシュ・フロー	34,329	12,549
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△29,473	△25,168
有形固定資産の売却による収入	10,267	591
投資有価証券の取得による支出	△2,800	△1,117
投資有価証券の売却による収入	4,354	272
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	—	1,506
子会社株式の取得による支出	△28,780	△312
その他	△687	2,769
投資活動によるキャッシュ・フロー	△47,119	△21,458
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△460	39,122
長期借入れによる収入	60,410	34,765
長期借入金の返済による支出	△46,910	△71,655
社債の発行による収入	15,100	—
社債の償還による支出	—	△30,000
コマーシャル・ペーパーの増減額 (△は減少)	△26,000	40,000
自己株式の取得による支出	△45	△37
配当金の支払額	△5,242	△5,241
少数株主への配当金の支払額	△2,998	△1,873
その他	△1,632	△1,581
財務活動によるキャッシュ・フロー	△7,779	3,497
現金及び現金同等物に係る換算差額	4,380	1,797
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△16,188	△3,614
現金及び現金同等物の期首残高	63,299	62,078
連結の範囲の変更に伴う現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	2,007	732
連結子会社の決算期変更による現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△62	—
現金及び現金同等物の四半期末残高	※49,055	※59,196

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

(1) 連結の範囲の重要な変更

第1四半期連結会計期間より、菱星尼崎電線(株)他2社を連結の範囲に含めております。

また、第1四半期連結会計期間において、三菱マテリアルツールズ(株)は、当社に吸収合併されたため、連結の範囲から除外しており、当第2四半期連結会計期間において、日立金属MMCスーパーアロイ(株) (旧MMCスーパーアロイ(株)) は、保有株式を一部売却したことにより持分比率が低下したため、連結の範囲から除外し、持分法適用関連会社となっております。

(2) 持分法適用の範囲の重要な変更

第1四半期連結会計期間より、エルエムサンパワー(株)他1社を持分法適用の範囲に含めております。

また、当第2四半期連結会計期間において、日立金属MMCスーパーアロイ(株) (旧MMCスーパーアロイ(株)) は、「(1) 連結の範囲の重要な変更」に記載のとおり、連結子会社より持分法適用関連会社となっております。

(会計方針の変更)

(退職給付に関する会計基準等の適用)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日。以下「退職給付適用指針」という。)を、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めについて第1四半期会計期間より適用し、退職給付債務及び勤務費用の計算方法を見直し、退職給付見込額の期間帰属方法を期間定額基準から給付算定式基準へ変更、割引率の決定方法についても、従業員の平均残存勤務期間に近似した年数に基づく割引率から、退職給付の支払見込期間および支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を使用する方法へ変更しております。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従って、当第2四半期連結累計期間の期首において、退職給付債務及び勤務費用の計算方法の変更に伴う影響額を利益剰余金に加減しております。

この結果、当第2四半期連結累計期間の期首の退職給付に係る負債が4,617百万円増加し、利益剰余金が3,611百万円減少しております。なお、当第2四半期連結累計期間の営業利益、経常利益及び税金等調整前四半期純利益への影響は軽微であります。

(有形固定資産の減価償却方法の変更)

従来、当社及び国内連結子会社の超硬製品製造設備の減価償却方法については、主として定率法を採用していましたが、第1四半期連結会計期間より定額法へ変更しております。この変更は、主に当社の筑波製作所における超硬製品増産設備の導入による生産能力の増強及び中期経営計画(2014-2016年度)の策定を契機に減価償却方法を検討した結果、今後の超硬製品の世界需要予測等から、安定的使用が見込まれ、技術的陈腐化リスクも少ないため投資の効果が従来に増して平均的に生ずると見込まれることから、定額法がより合理的と判断したことによるものであります。

この結果、従来の方によった場合と比較し、当第2四半期連結累計期間の営業利益、経常利益及び税金等調整前四半期純利益は、それぞれ894百万円増加しております。

また、従来、国内連結子会社のアルミ缶製造設備の減価償却方法については、主として定率法を採用していましたが、第1四半期連結会計期間より定額法へ変更しております。この変更は、中期経営計画(2014-2016年度)の策定を契機に減価償却方法を検討した結果、今後のアルミ缶需要予測等から、安定的使用が見込まれ、技術的陈腐化リスクも少ないため投資の効果が従来に増して平均的に生ずると見込まれることから、定額法がより合理的と判断したことによるものであります。

この結果、従来の方によった場合と比較し、当第2四半期連結累計期間の営業利益、経常利益及び税金等調整前四半期純利益は、それぞれ440百万円増加しております。

(表示方法の変更)

(四半期連結損益計算書)

従来、セメント事業における一部の米国連結子会社は、生コンクリートの輸送関連費用を「販売費及び一般管理費」として表示しておりましたが、第1四半期連結会計期間より「売上原価」として表示する方法に変更いたしました。

この変更は、当連結会計年度を起点とする中期経営計画(2014-2016年度)において米国生コンクリート事業の収益拡大を見込んでいることから、これを契機に、当該費用について、その発生の態様と収益との対応関係を再検討したことに伴い、売上原価と販売費及び一般管理費をより適正に表示するために行ったものであります。

この表示方法の変更を反映させるため、前第2四半期連結累計期間の四半期連結損益計算書の組替を行っております。

前第2四半期連結累計期間の四半期連結損益計算書において、「販売費及び一般管理費」として表示していた6,829百万円は、「売上原価」として組み替えております。

(四半期連結財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理)

(税金費用の計算)

税金費用については、当第2四半期連結会計期間を含む連結会計年度の税引前当期純利益に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、税引前四半期純利益に当該見積実効税率を乗じて計算しております。

(四半期連結貸借対照表関係)

1 保証債務

連結会社以外の会社及び従業員の銀行からの借入等に対し、債務保証を行っております。

前連結会計年度 (平成26年3月31日)		当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)	
シミルコファイナンス社	15,824百万円	シミルコファイナンス社	16,655百万円
株式会社エクシム	3,475	株式会社エクシム	3,649
ジェコ2社	3,296	ジェコ2社	3,341
三菱原子燃料株式会社	1,500	三菱原子燃料株式会社	3,300
コベルコマテリアル・カップー		コベルコマテリアル・カップー	
チューブ・タイランド社	1,840	チューブ・タイランド社	1,901
カップーマウンテンマイン社	1,416	カップーマウンテンマイン社	1,493
株式会社コベルコマテリアル銅管	1,035	株式会社コベルコマテリアル銅管	1,035
従業員	2,408	従業員	2,553
その他(11社)	2,257	その他(11社)	2,062
計	33,053	計	35,992

2 受取手形割引高等

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
受取手形割引高	3,658百万円	375百万円
債権流動化による遡及義務	7,976	4,846

(四半期連結損益計算書関係)

※ 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)
運賃諸掛	13,996百万円	14,276百万円
減価償却費	1,444	1,540
退職給付費用	1,236	1,741
役員退職慰労引当金繰入額	247	213
賞与引当金繰入額	3,639	3,997
給与手当	13,962	14,568
賃借料	3,096	3,059
研究開発費	5,479	5,358

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は次のとおりであります。

	前第 2 四半期連結累計期間 (自 平成25年 4 月 1 日 至 平成25年 9 月30日)	当第 2 四半期連結累計期間 (自 平成26年 4 月 1 日 至 平成26年 9 月30日)
現金及び預金勘定	50,267百万円	61,235百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	△1,007	△1,847
拘束性預金	△204	△191
現金及び現金同等物	49,055	59,196

(株主資本等関係)

I 前第 2 四半期連結累計期間 (自平成25年 4 月 1 日 至平成25年 9 月30日)

1. 配当金支払額

(決 議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年 5 月10日 取締役会	普通株式	5,242百万円	4円	平成25年 3 月31日	平成25年 6 月 3 日	利益剰余金

2. 基準日が当第 2 四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第 2 四半期連結会計期間末後となるもの

(決 議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年11月 6 日 取締役会	普通株式	2,621百万円	2円	平成25年 9 月30日	平成25年12月 6 日	利益剰余金

II 当第 2 四半期連結累計期間 (自平成26年 4 月 1 日 至平成26年 9 月30日)

1. 配当金支払額

(決 議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成26年 5 月12日 取締役会	普通株式	5,241百万円	4円	平成26年 3 月31日	平成26年 6 月 2 日	利益剰余金

2. 基準日が当第 2 四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第 2 四半期連結会計期間末後となるもの

(決 議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成26年11月11日 取締役会	普通株式	3,931百万円	3円	平成26年 9 月30日	平成26年12月 5 日	利益剰余金

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

I 前第2四半期連結累計期間（自平成25年4月1日 至平成25年9月30日）

報告セグメントごとの売上高及び利益の金額に関する情報

(単位：百万円)

	セメント 事業	金属 事業	加工 事業	電子材料 事業	アルミ 事業	その他 の事業	計	調整額	四半期連結損 益計算書計上 額
売上高									
(1) 外部顧客への 売上高	85,582	361,248	57,954	23,847	77,098	97,956	703,688	—	703,688
(2) セグメント間 の内部売上高 又は振替高	1,619	5,730	14,560	10,667	476	20,206	53,261	△53,261	—
計	87,202	366,978	72,515	34,514	77,575	118,163	756,949	△53,261	703,688
セグメント利益	6,766	16,865	7,026	973	3,904	2,577	38,114	△2,628	35,485

(注) 1. その他の事業には、原子力関連、環境リサイクル関連、不動産、エンジニアリング関連等を含んでおります。

2. セグメント利益の調整額△2,628百万円には、セグメント間取引消去561百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用△3,190百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費、基礎的試験研究費及び金融収支であります。

3. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

II 当第2四半期連結累計期間（自平成26年4月1日 至平成26年9月30日）

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益の金額に関する情報

(単位：百万円)

	セメント 事業	金属 事業	加工 事業	電子材料 事業	アルミ 事業	その他 の事業	計	調整額	四半期連結損 益計算書計上 額
売上高									
(1) 外部顧客への 売上高	88,913	405,578	56,394	26,480	79,945	93,881	751,194	—	751,194
(2) セグメント間 の内部売上高 又は振替高	1,693	4,459	11,701	4,048	972	20,871	43,747	△43,747	—
計	90,606	410,038	68,095	30,529	80,918	114,752	794,941	△43,747	751,194
セグメント利益	6,046	16,805	8,150	3,330	3,613	4,942	42,888	△2,809	40,079

(注) 1. その他の事業には、原子力関連、環境リサイクル関連、不動産、エンジニアリング関連等を含んでおります。

2. セグメント利益の調整額△2,809百万円には、セグメント間取引消去152百万円、各報告セグメントに配分していない全社費用△2,962百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費、基礎的試験研究費及び金融収支であります。

3. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントの変更等に関する事項

当社は、平成26年4月1日に実施した組織再編に伴い、第1四半期連結会計期間より、報告セグメントの名称を「銅事業」から「金属事業」に変更しております。また、「その他の事業」に含んでおりました貴金属の地金に関する事業を「金属事業」に区分しております。

なお、前第2四半期連結累計期間のセグメント情報は、変更後の報告セグメントの区分に基づき作成したものを開示しております。

(金融商品関係)

投資有価証券が、企業集団の事業の運営において重要なものとなっており、かつ、前連結会計年度の末日に比べて著しい変動が認められます。

前連結会計年度末 (平成26年 3 月31日)

科目	連結貸借対照 表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
投資有価証券			
関係会社株式	53,585	80,545	26,960
其他有価証券	114,608	114,608	—

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法

これらの時価について、株式は取引所の価格によっています。

2. 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 82,383百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上記の「投資有価証券」には含めておりません。

当第 2 四半期連結会計期間末 (平成26年 9 月30日)

科目	四半期連結貸借対照 表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
投資有価証券			
関係会社株式	57,186	110,831	53,644
其他有価証券	120,297	120,297	—

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法

これらの時価について、株式は取引所の価格によっています。

2. 非上場株式 (四半期連結貸借対照表計上額 86,640百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上記の「投資有価証券」には含めておりません。

(1 株当たり情報)

1 株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第 2 四半期連結累計期間 (自 平成25年 4 月 1 日 至 平成25年 9 月30日)	当第 2 四半期連結累計期間 (自 平成26年 4 月 1 日 至 平成26年 9 月30日)
1 株当たり四半期純利益金額	22円31銭	17円73銭
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額 (百万円)	29,239	23,238
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る四半期純利益金額 (百万円)	29,239	23,238
普通株式の期中平均株式数 (千株)	1,310,639	1,310,397

(注) 潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

(追加情報)

当社は、日立金属株式会社との間で、同社の完全子会社である日立ツール株式会社の発行済株式の51%を平成27年4月1日を予定日として当社が取得することを内容とした契約を平成26年9月26日付で締結しました。

1. 株式取得の目的

日立ツール(株)が有する高精度・高能率・高速加工を可能とする最新の超硬製品ラインナップ及び多様な部材の複雑な形状加工に関する提案能力を拡充することによる当社超硬事業の基盤強化を目的としております。

2. 取得する会社の名称

日立ツール株式会社

3. 事業の内容

特殊鋼・超硬合金等によるチップ、切削工具、耐摩製品、都市開発工具等、各種機械工具の製造・販売

4. 経営成績等（子会社等を含む平成26年3月期実績）

売上高	189億円
経常利益	34億円
資本金	14億円

2 【その他】

第90期（平成26年4月1日から平成27年3月31日まで）中間配当については、平成26年11月11日開催の取締役会において、平成26年9月30日を基準日として、次のとおり実施することを決議いたしました。

- | | |
|----------------------|------------|
| ① 中間配当金の総額 | 3,931百万円 |
| ② 1株当たり中間配当金 | 3円 |
| ③ 支払請求権の効力発生日及び支払開始日 | 平成26年12月5日 |

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成26年11月13日

三菱マテリアル株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 沢田 昌之 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 上坂 善章 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 高野 浩一郎 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている三菱マテリアル株式会社の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間（平成26年7月1日から平成26年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成26年4月1日から平成26年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、三菱マテリアル株式会社及び連結子会社の平成26年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

強調事項

表示方法の変更に記載されているとおり、会社は、セメント事業における一部の米国連結子会社の生コンクリートの輸送関連費用については、従来、「販売費及び一般管理費」として表示していたが、第1四半期連結会計期間より「売上原価」として表示する方法に変更している。

当該事項は、当監査法人の結論に影響を及ぼすものではない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R Lデータは四半期レビューの対象には含まれておりません。